

## 桂離宮を巡る (7) 室内の装飾と内からの景色

藤原 道夫

桂離宮の意匠のすばらしさは、建物の内装によく表されている。また室内から見える景色にも工夫がみられる。

先ず襖から見てみよう。古書院一の間は、胡粉地に黄土と雲母の粉末をまぜあわせて唐紙に型押しした五三の桐文様でおおわれている。光のあたり具合により、文様が淡い黄色にきらめく。上部欄間の黒っぽい格子との調和も美しい。中書院や新御殿の部屋にも同様の襖が設けられている。書院内に上がって襖を見学できたのは、凡そ50年前に初めて参観した時のみ、以降は案内がない。

新御殿の一角に、天下の名棚として知られる「桂棚」が設けられている。紫檀や黒檀などの舶来の銘木18種が使われている、と説明された。この棚はごたごたして見ために美しいとは思えない。修学院離宮の中御茶屋客殿にある「霞棚」の方がすっきりしていて優美、天下随一だと思う。

松琴亭一の間は、加賀奉書の白と藍の市松模様となっている。これはいつ訪ねても見ることができる。運がよければ張替えたばかりの襖に出あえる。藍色は次第にあせてゆく。この市松模様は桂離宮を代表するデザインとされ、2020東京オリンピックのロゴマークの基になった。

桂の地は古くから月の名所として知られていた。古書院二の間の広縁から東に向けて、丸竹を横詰めにした月見台がはり出している。写真で見たことだが、池の向こうの樹林から月が昇ると、月見台から見て池の水面にも月が映るように仕掛けられている。月はこの離宮のモチーフとなっており、襖の引手や欄間のデザインに応用されている。

書院群の北隣りで池の西側に建つ月波楼は、月がよく見える位置に建つ。池に映った月の揺らめく光が、居間の天井に届くように設計されているとか。ここの中の間は、紅葉を散らして描いた上に雲母の入った白い流水紋が入っている。淡い光を受けて紋がかすかにきらめく様子は、さぞ奥ゆかしいだろう。

離宮の南端に建つ笑意軒は二代目当主智忠親王の時代に建てられ、大変に凝った造りとなっている。軒下の小壁に六つの丸窓がならび、それぞれ縦と横の棧の格子模様が異なっている。建物東端の軒下に「浮月」(うきづき)の銘がある手水鉢が置かれている。能『松風』の中にシテ松風(須磨で在原行平の寵愛をうけた夕汲み女の一人)が「月は一つ 影は二つ」と謡う場面がでてくる。そんな風雅な心がここにもうけ継がれているのだろう。

笑意軒の内装について必ず説明を受けるのが、中の間肘掛下の装飾のこと。舶来のビロード生地を市松模様にして対角線の上部にはり、下は金箔地が使われている。豪華な意匠なのだろうが、これを見て感心したことがない。むしろその部屋から見える外の田畑の景色にはっとさせられた。このあたりを宮内庁が買いあげ、地元農家に利用してもらっているとのこと。こうして離宮の景観が守られている。